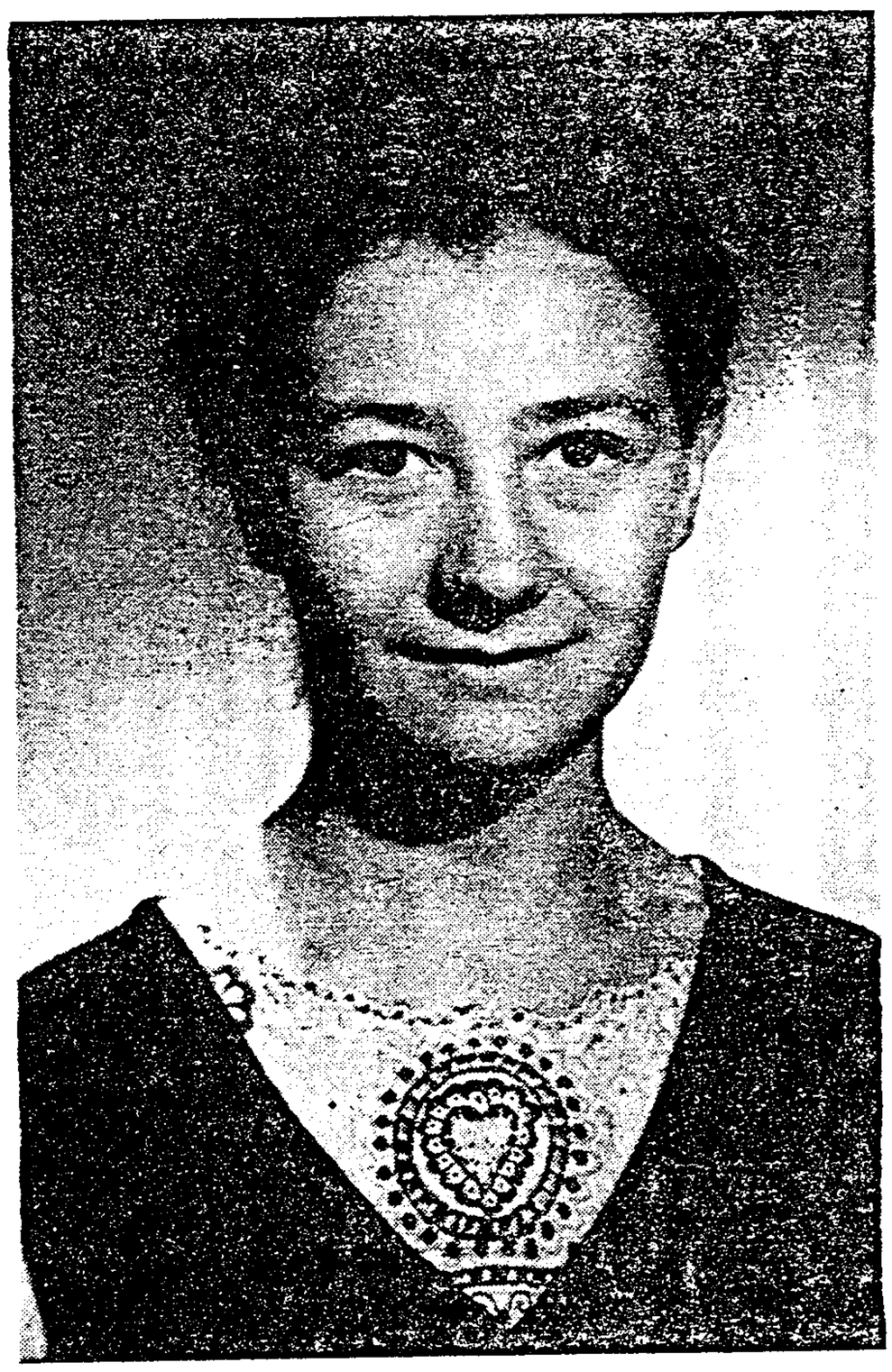
【あとがき】

訳者がこの絵本を知ったのは、奈良大学の在外研修によりペルーに留学していた１９８４年の初夏（南半球のペルーでは初冬）のことである。ペルー・アンデス中部のワンカーヨ地方を訪れ、日本語に翻訳したい旨をアナ・マイヤーのご家族にお伝えしてから、はや１０年が経過しようとしている。大半は訳者の怠慢によるが、訳してしまうのが、何となく惜しい気がしたからかもしれない。そのご、ワンカーヨ地方は、例にもれず「テロリズム」の嵐に巻き込まれ、マイヤー一家もまた、やむをえぬ理由により出身地のドイツに居を移された、とのことである。

このたび、訳者は、ふたたび奈良大学の在外研修によりオーラル・ヒストリー研究の目的でペルーに留学することになった。調査地はペルー・アンデス南部のクスコ地方であるが、ワンカーヨ市に位置するペルー中部大学（人類学系）にお世話になる。不思議な縁を感じたしだいである。ひとつの区切りをつけるためにも翻訳を決心した。

原作者アナ・マイヤー（Ana Mayer）は、ちょうど訳者と同年の１９４８年１１月２日ワンカーヨ市のサンカルロスでドイツ系移民の家庭に生まれた。遺稿集 *Recuerdos*（１９７４年刊）のギエルモさんの序文によれば、多感な少女で病弱でもあったようである。首都リマで中等教育を受けたあと、英語学校に進み、詩作を開始した。終了後、英語学校に教師として残るとともに、エル・アグスティーノというリマ市の有名なスラム街で無報酬で教師として活動するようになった。１９６０年代末のことであり、人生の目的を発見した、この頃がもっとも幸福な時代だったであろう、と書かれている。やがてイギリスに留学し、手織りの技術を勉強する。手工芸と教育をいかに結びつけるか、そこにペルー山岳部やリマのスラム街が直面している諸問題を解決する糸口をみつけようとしていたのである。



１９７１年５月癌のため緊急手術を受け、療養のため渡仏する。ペルーに帰国後は、気分のよいときは、織物をし、絵を描き、そして本号で訳出した絵本 *Santiago* を完成させ

ようとしたり、創作民話『古代の織機』（翻訳予定）を執筆したりしてすごした。そして、１９７３年2月2日、２５才で永眠した。マンタロ谷を眼下におさめ、雪山を遠望するビルカコト村の墓地に眠っている。

『サンチャゴの世界』はアナの没後に出版された。上巻の最後の「ペルーの子供たちへ」は以下のとおり、その趣旨を説明している。「研修休暇でワンカーヨ近郊のマンサナレス村で働いていたときや、リマのエル・アグスティーノで教員をしていたときに、アナは、ペルーの子供たちには良い本が読めることが必要なことに気がつきました。だから、長い時間をかけて『サンチャゴの世界』のための素材を構想し、用意しました。一生懸命この本を完成させ、あなたがたみんなにお贈りしたのです。」

同書は小学校高学年程度の児童でも読める内容になっているが、寒村の農家の出身の子供を主人公にしてその誕生から婚姻までを描いているところから判断すれば、都市の中産階級以上の家庭の児童よりも、教育の恩恵にあまり浴していない、教科書やノートにも不自由しているような、農村の児童や都市のスラム街の児童向けに書かれていることが分かる。こういう意味での副読本はペルー全土でもいまなお少なく、ワンカーヨ地方に限定すれば、本書以外では、日系のニコラス・マタヨシさん編集の本 *Los tesoros de Catarina Huanca* が思い浮かぶくらいである。残念ながら、本訳書では絵がぜんぶ白黒になっているが、原書では色彩画も多く含まれている。天然色の絵本や教科書をあたりまえのように思っている日本の子供たちには想像もできないかもしれないが、ペルーではいまなおそれはぜいたくな希望なのである。

そして、同書は Enrad-Perú より全国テレビ小説賞を受賞し、すでにフランス語版も刊行されている（ただし、絵は新たに書き直されている）。前回の留学当時、すでに米語版の出版計画のあることも聞いた。なによりも、市中の書店の書架ではディズニーなど外国出版社の翻訳絵本が多く並べられているなかで、同書は地元で作られた絵本として表装・内容とも異彩を放つ存在であった。そうでなければ、一介のアジア人歴史研究者の眼に止まるはずはない。

最後に、同書翻訳にあたり、訳者は当初原書と同じ形式で、つまり児童向けの絵本として日本語に翻訳する予定であった。しかし、１０年の歳月が経過するなかで、アナさんの意向（絵本の形式をとった、ペルーの農村ないし農村出身の児童向けの副読本）を現在の日本で活かすには、「国際理解教育」のテキストの形式のほうが適しているように思えてきた。

その結果、第１に、原注に訳注を大幅に加えることにした。そのさい、リマ日本人学校が作成した社会科用の「国際理解教育」テキストを参照したりした。第２に、スペイン語の原文を残すことにした。左ページの絵とスペイン語だけをコピーして編集すれば、スペイン語学習用のテキストとして利用することも可能である。基本構文はひととおり揃っている。実際、アンヘリカがスペイン語会話のテキストとして利用し、好評を博したという。

第３に、巻末にケチュア語訳を添付した。ワンカーヨでご家族にお会いしたとき、もともと原稿の段階ではスペイン語の他にケチュア語でもアナさんは書いていた、というお話をうかがったからである。ペルーでも８０年代になるとプーノ地方を中心に本格的に二言語二文化併用教育が開始されるが、アナさんの試みは手織と教育の結合といい、ケチュア語とスペイン語の併用といい、最近の潮流を先取りするものでもあった。ワンカーヨ地方のケチュア語とは少し異なるが、今回アンヘリカ・パロミーノ＝青木がクスコ地方のケチュア語に翻訳した。ケチュア語は長い間音声言語として伝承されてきたので、現在のアルファベットは、いくつかの子音で出気音や放出音などの区別はあるが、大体発音と一致している。アルファベットどおりに発音し、その音を楽しんでいただければ幸いである。

なお、本文中には記さなかったが、図表や訳注のために参照した主要文献は以下のとおりである。また、４番目の『コノスカモス　ペルー』は、真鍋周三さんのご好意により複写本を入手することができた。

大貫良夫ほか監修『ラテン・アメリカを知る事典』（平凡社、１９８７年）

友枝啓泰ほか編『大アンデス文明展：図録』（朝日新聞社、１９８９年）

Ｆ・ピース、増田義郎共著『図説インカ帝国』（小学館、１９８８年）

山本紀夫『インカの末裔たち』（日本放送出版協会、１９９２年）

リマ日本人学校編『コノスカモス　ペルー』（リマ日本人学校、１９９０年）

Ben Box, ed., *South American Handbook 1994*, Trade & Travel, 1993.

Alberto Tauro, *Enciclopedia ilustrada del Perú*, 6 vols., PEISA, 1987.

その他、訳者らの小文も参照していただければ幸いである。

青木芳夫「ペルーの二重言語教育の二類型」『奈良史学』第５号（１９８７年）

青木芳夫「ペルー・クスコの子供たち ── 児童画交流と『国際化』 ── 」『奈良大学紀要』第１９号（１９９１年）

パロミーノ＝青木アンヘリカ「アンヘリカの現代ケチュア語入門（一）」『資料ラテンアメリカ』第１０号（１９８８年）［品切、コピー可］

パロミーノ＝青木アンヘリカ、青木芳夫共編「ケチュア語／スペイン語／日本語小辞典」『資料ラテンアメリカ』第１７号（１９９１年）

以上

（１９９４年２月　青木芳夫記）